

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 5 日現在

機関番号：17201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370594

研究課題名(和文) ライフストーリーを用いた学部留学生の将来像の形成過程に関する研究

研究課題名(英文) Using Life Stories of International Students to Understand the Process of Making a career plan

研究代表者

中山 亜紀子 (NAKAYAMA, AKIKO)

佐賀大学・全学教育機構・准教授

研究者番号：20549141

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日本の大学に在籍中の留学生あるいは、元留学生のライフストーリーを聞き取った。書きあがったストーリーは、10本(中国、韓国)である。これらを将来像の形成過程という点から分析すると、日本での就職を目指すには、日本語を使ったなんらかの「居場所」が必要であること、モデルの存在が将来像の形成に大きく関わっていることが明らかになった。また「正しい日本語」を目指すのではなく、留学生の肯定的な「日本語を話す自己」の形成に寄与する日本語教育、キャリア教育の必要性が指摘された。今後、ライフストーリーを使った教育実践の他、本研究で使われたライフストーリー研究手法を精緻化する課題が浮かび上がった。

研究成果の概要(英文)：In our research, eleven life stories of Chinese and Korean undergraduate students who are studying or have studied in Japan are examined with two main questions in mind: how do they make their career plan such as where find a job or going to graduate school? And what are the significant issues in making these visions? Life stories made from the interviews indicate that a) having a comfortable place to speak Japanese is necessary in making a decision for finding employment in Japan; and b) having a good role model plays a crucial role in shaping their career plan. Our research also suggest that alternative Japanese teaching in which the emphasis is placed on helping the learner build a positive Japanese speaking self. In the future we want to refine our research methods and use life stories as part of the classroom curriculum and evaluate how effective they are in improving students' sense of self as Japanese language users.

研究分野：日本語教育

キーワード：ライフストーリー 学部留学生 留学 韓国人留学生 中国人留学生

1. 研究開始当初の背景

言語習得には、第二言語使用者としての自己の発達を伴っているという (Pavlenko & Lantolf, 2000)。学習者がどのように自己を発達させるのか、その軌跡を明らかにすること、およびその自己の発達を援助する日本語教育の在り方の検討が求められている。

2. 研究の目的

特に学部留学生は、日本語の自己の発達のみならず、大学卒業後の人生の生き方を決めるという発達上の課題にも直面している。学部留学生が将来像を具体化する過程に、日本語の自己はどのように結びついているのだろうか。

本研究では、1) 将来像の形成に焦点をあてて、学部留学生のライフストーリーを作成する。2) 集められたライフストーリーに日本語の自己はどのように表れているのか考察を加え、3) 新たな日本語教育/キャリア教育の在り方を提言することを目的としていた。

3. 研究の方法

ライフストーリーはさまざまな手法があるが、その中でも研究者が対象者のストーリーを理解し、ストーリーとして書き表すという解釈学的ライフストーリーを用いた。この解釈学的ライフストーリーは、ナラティブセラピーなどの臨床心理学および、リクールなどの解釈学にその源流を持っている。

その特徴として、ライフストーリーは、研究者の声と研究協力者の声を分離せず、研究協力者を主人公としたストーリーとして書かれる。例えば、「Sさんは、田舎に生まれました」などだ。研究者と研究協力者の声を分離しないことは、三代 (2014) によって批判されているが、「研究者が理解した」という限定はつくものの、研究協力者から見た世界が描けるという利点がある。

また、そのライフストーリーの読者は、ライフストーリーの主人公である研究協力者の世界を「物語」として知ることになり、自分自身の持っている世界観を揺さぶられることもある。

4. 研究成果

10本のライフストーリーが作成された。研究に協力してくれた留学生は学部留学生、短期留学生、編入生などである。地域的にも都市部に偏ることなく、北海道/東北地区、関東、関西、九州の私立/国公立大学で学んでいる留学生のストーリーが作成できた。研究協力者の出身国は、中国、および韓国で、当初の予定より偏ってしまった。また、当初予定より本数が少なかったのは、解釈学的ライフストーリー作成に、予想以上に時間がかかったからだ。

作成されたライフストーリーは、ライフストーリー集として、本研究グループで共有し

ている。本研究グループは、これらのライフストーリーをもとに、学部留学生の将来像形成と日本語を話す自己との関係について、考察を深めた。本研究で明らかになったことは、以下の3点である。

1) 学部留学生は大学生活の中で、「日本語を話す」新しい自己を構築しなければならないが、その葛藤に満ちた過程の中で、日本語におけるなんらかの「居場所」が必要であることが明らかになった。その居場所とは、時にアルバイト先、時にゼミであったが、彼らが日本語を使う空間の中で、日本語を使う自己に肯定的な感覚を得られる場所であった。それは、新たな自己の構築を多くの場合伴っていた。

2) さらに、将来像の形成には、モデルの存在が非常に重要であった。そのモデルとは、日本で出会う必要があるわけではなく、母国でのモデルもあった。

3) しかしながら、将来像の形成には、日本語を話す自己だけではなく、母国での状況や日本と母国との経済状況なども関わっていることが明らかになった。このことは、将来像の形成は、常に世界の経済状況などに左右されるということ、時間を超えた一般化/図式化することは非常に複雑であることを意味している。

これらのことから、「正しい日本語」を目指すのではなく、留学生の肯定的な「日本語を話す自己」の形成に寄与する日本語教育の必要性、日本人をモデルとするのではなく、先輩留学生や同国人ネットワークの中で見つけられたモデルを積極的に取り入れるキャリア教育の必要性が指摘された。

本研究の分担者である中谷は、これらの知見を活かして、学部留学生を対象とした日本語授業の中で、本研究で作成されたライフストーリーを使って実践を行った。そこでの成果は、今後の課題として、これから本格的に検証される予定である。またライフストーリーを日本人学生と留学生の共修授業に教材として応用されている (久野、2016)。

今後は、本研究で作成されたライフストーリーを使った教育実践を開発する、本研究で使われた解釈学的ライフストーリー研究手法を精緻化するなどに課題に向き合う予定である。

引用文献

Pavlenko, A. and J. Lantolf (2000) Second language learning as participation and the (re) construction of selves. In J. P. Lantolf (ed.) Sociocultural theory and second language learning. Oxford: Oxford University Press, pp. 155-177.

三代純平 (2014). 日本語教育におけるライフストーリー研究の現在—その課題と可能性について『リテラシース』14, 1-10

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 12 件)

中山亜紀子、韓国人留学生のライフストーリー 新しい世界を作る、韓国日本語学会第34回国際学術発表大会予行集、査読有、34、2016、143-147

久野弓枝、日本人学生は留学生のストーリーをどのように捉えるのか—留学生と日本人学生のピア・ラーニングの試み、日本語教育国際研究大会 2016、Proceedings、査読有、2016、10-15

中谷潤子、ポストスハルト期におけるインドネシア華人のアイデンティティ—スラバヤでのインタビュー調査より、大阪産業大学論集人文・社会科学編、査読無、26号、2016、53-67

久野弓枝、行為能力発達の観点による元中国人編入留学生のライフストーリー分析—就職支援としてのビジネス日本語教育—、シンガポールビジネス日本語教育国際研究大会論文集、2016

久野弓枝、中国人編入留学生のライフストーリー研究(2)—進路決定要因に着目して—、文化と言語、査読無、83号、2015、41-52

中谷潤子、インドネシア華人の「自分は何者か」という語り—ライフストーリーより、華僑華人研究、査読無、12号、2015、45-54

久野弓枝、中谷潤子、元学部留学生のライフストーリーからみる進路選択に関わる重要な要因、CAJLE2015Proceedings、査読有、2015、134-141

久野弓枝、中国人編入留学生のライフストーリー研究(1)—編入留学後の問題に着目して—、札幌大学総合論叢、査読無、39号、2015、63-73

中山亜紀子、佐藤正則、中国人女子学部留学生の留学動機と将来像、CAJLE2014 Proceedings、査読有、2014、85-93

中谷潤子、EPAによるインドネシア人看護師候補者の滞日決定要因—ライフストーリー・インタビューから、大阪産業大学論集人文・社会科学編、査読無、19号、2013、27-46

佐藤正則、日本語教育実践する私がライフストーリーを研究することの意味—元私費留学生のライフストーリーから、リテラシーズ、査読無、14巻、2013、55-71

中山亜紀子、わからない原因を考える—ライフストーリーのより深い理解に向けて、リテラシーズ、査読無、14巻、2013、43-54

〔学会発表〕(計 15 件)

中山亜紀子「ある韓国人留学生のライフストーリー—新しい世界を作る」韓国日本語学会第34回国際学術発表大会 2016(ソウル東国大学)

NAKATANI Junko, “Identity of Young Chinese Indonesians in Japan in the Era of

Globalism “, at Celebrating 20 Years of SEASREP and Southeast Asian Studies, 2015 Southeast Asian Studies Regional Exchange Program, University of Gajah Mada, Indonesia

久野弓枝「日本人学生は留学生のストーリーをどのように捉えるのか—留学生と日本人学生のピア・ラーニングの試み」日本語教育国際研究大会 2016(バリ)

中谷潤子「EPAインドネシア人看護師が日本生活者となるまでの過程—ライフストーリーより—」バリ日本語教育国際研究大会 2016、(バリ)

Akiko NAKAYAMA “Do you like yourself when you are using Japanese” JALT2015 (静岡)

久野弓枝・中谷潤子「元学部留学生のライフストーリーからみる進路選択に関わる重要な要因」CAJLE2015年次大会(バンクーバー)

佐藤正則、日本企業に就職した元留学生のライフストーリー—関係性構築のためのことばという視点から—、2015年日本語教育学会秋季大会(沖縄国際大学)

小笠原はるの、久野弓枝、荒木奈美「教育実践研究におけるナラティブ・アプローチの可能性—語ること、聞くこと、そこから生まれること」日本臨床教育学会、北海道臨床が教育学会第5回研究大会、2015、(北海道教育大学札幌校)

佐藤正則、中山亜紀子、「中国人女子留学生のライフストーリーからみる留学動機と将来像」2015年言語文化教育研究学会年次大会(早稲田大学)

中谷潤子「若手インドネシア華人のアイデンティティ変容—時代と世代に注目して—」2014年度日本華僑華人学会大会(早稲田大学)

中山亜紀子、佐藤正則「女子留学生の留学動機と将来像」CAJLE2014年次総会(モントリオール)

中谷潤子、中山亜紀子、久野弓枝「学部留学生の進路選択—ライフストーリーから考える」2014年日本語教育国際研究大会(シドニー)

瀬井陽子、久野弓枝、範玉梅、青木直子「移住女性の文化資本としての言語」JALT2013(神戸)

佐藤正則「日本語教育におけるライフストーリー研究の意義と課題—元私費留学生のライフストーリーから」日本語教育学会 2013年度春季大会(立教大学)

中山亜紀子「日本語教育におけるライフストーリー研究の意義と課題—日本語学習の意味」日本語教育学会 2013年度春季大会(立教大学)

〔図書〕(計 3 件)

佐藤正則「語り手の「声」と教育実践を媒介する私の応答責任—日本語教育の実践者

がライフストーリーを研究することの意味」
三代純平（編）『日本語教育学としてのライフ
ストーリー 語りを聞き、書くということ』
くろしお出版、pp.220-247、2016年
中山亜紀子「ライフストーリーを語る意義」
三代純平（編）『日本語教育学としてのライフ
ストーリー 語りを聞き、書くということ』
くろしお出版、pp.168-189、2016年
中山亜紀子『「日本語を話す私」と自分ら
しさ 韓国人留学生のライフストーリー』コ
コ出版、2016、252

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中山 亜紀子 (NAKAYAMA Akiko)
佐賀大学・全学教育機構・准教授
研究者番号：20549141

(2) 研究分担者

中谷 潤子 (NAKATANI Junko)
大阪産業大学・教養部・准教授
研究者番号：20609614
久野 弓枝 (KUNO Yumie)
札幌大学・地域共創学群・准教授
研究者番号：20453243

(3) 連携研究者

()
研究者番号：

(4) 研究協力者

佐藤 正則 (SATO Masanori)